

ワーカーズコープ「エコテック」が目指すもの（1）

都 筑 建（東京都/株エコテック・代表）

労働者生産協同組合（ワーカーズコープ）の事業体を現代の今、つくるとすれば、何のためにどのような姿で運営持続させていくかをできるだけハッキリさせていかなければなりません。

時代的条件が整っていることも大事な要素ですが、もしそれだけなら風潮に乗っているだけとなり、いずれは漂流してしまうことになるでしょう。

私達が「エコテック」を設立し、ワーカーズコープ（ワーカーズコレクティブ）として活動していく時の原初の思いは以下の様なものです。

今は質的変革の時代に入った。環境をめぐる状況は厳しいものがあり、河川や海洋の汚染、オゾン層破壊によるオゾンホール の出現、自然の乱開発、農薬や化学調味料などによる難病の発生など、まさに「人類の危機」と言えます。

大量生産、大量消費、大量廃棄の「現代社会システム」のもたらす危機的状況を打開するには、モノの作り方、使い方、生活の仕方、あり方をもう一度考えてみる必要があります。

特に「モノづくり」に携わってきた者達はあまりにもこれらのことに逃げ腰であり受け身的であり、トータルの影響に自分達の造るものがどのように関わっているか無関心を装ってきました。しかし、今はみんなと同じことをやることは無責任を意味します。

働くこと、仕事をする、モノを造ることの過程にこそもっとスポットライトを当てて検証されるべきでしょう。現在、この過程は企業競争の名目で遮られて秘密のベールに包まれたままです。

何のために（誰のために）、どのようなものを、どんな方法で、誰と一緒に造るのが問われています。金のため（儲けのため）なら何をしてもよいという、現代の「善」では人類の危機を解消で

きず、存続そのものも怪しくなっていることがハッキリしてきました。だから心ある者達は現実的方法でモノ造りを通して変革をしてゆこうとします。

私たちは原始に戻ろうと叫んでいるではありません。現在私たちが享受している「快適」な文明は捨て去られるべきものでなく、又一部の為政者や実業家達だけで作ってきたものでもありません。良くも悪くも、私たちと同じ市民であり、消費者であり、労働者であり、生活者である者達もどんなに虐げられた状態であっても一緒に造ってきたのであり、私たちはこれらを取捨選択をしながら継承し変革のベースにしようと思えます。つまり、現代の危機的状況を作ったのは決して「向こう側」だけでなく、私たちを含めた「こちら側」にも責任があると考えます。

環境問題は現代のキーワードです。これは一時的風潮でなく、まさに私たちの暮らし方や未来社会に直接にも間接にも関わってくるからです。

私たちは、私たちとの関連とその意義を深く理解するものの、ボランティア事業をやろうとしているわけではありません。私たちの生きる「生業」が生きがいのあるものと一致することを強く望みます。あまりにも中途半端な「生業」の仕方をしているとそこには嘘が出て、逆に私たちが変質し、させられます。生きがいのある生業を私たちが手に入れるのは、社会変革に責任を持って参加し実行者になれる時でしょう。

私たちの提案は非常に具体的です。だからワーカーズコープの実体を作り、表明しながら株式会社の形式とそのパスポートも採用した事業体を作ろうとします。

私たちは20年近くも石けん運動（環境問題）を積み重ねてやってきました。労働者の権利の問題も真剣に取り組み、原発や核の問題でも、又福祉

や差別の問題でも日常的に積極的にやってきました。これらの中から原発監視のネットワークの中で使われる放射能測定器(R-DAN、たんぼぼ)を開発し、又廃食油から石けんを作ることで河川を汚さないための石けん製造機を開発、製造し、運動と密接に関わりながらやってきました。その運動への参加も、運動の道具を造るだけでなく、その運動が分断状態になっている場合にも、一方のみに依拠するのではなく、逆に道具を通して両者の橋渡しの役割を行ってきました。今開発中のドラム式洗濯機「エコドラム」はこれらの中に位置しています。

エコテックで実務を担うメンバーはもともとこれらの中心でもありました。環境測定器や福祉機器も又しかりです。私たちの生き方やモノづくりの仕方が特別なことでなく、当たり前になることを望み、生活者や市民や労働者が主人公になることを実行したいし、又新しい人たちに参加を促し、モノづくりを通して伝承していこうと思います。

WooCo株式会社エコテックは洗濯機「エコドラム」や環境測定器や福祉機器の製造に関連する企業、事業体、個人の出資により、また「協同」の理念にもとづいた運営と労働者生産協同組合グループのネットワークの一環として設立しようとしています。

「1993・9・20付の設立趣意書より」

人類や地球の危機は、冷戦構造の転換を契機に政治的・イデオロギー的対立からもたらされる危機の底に、あるいはそれ以上の規模と深さで、大量生産、大量消費がもたらす「発展」によってもたらされている。環境問題は反体制やマニアの専有物ではない。ましてや資本家のしよく罪の手段でもない。

「発展」という言葉が「持続」という言葉によって変わらねばならない時代になった。

私達が真剣に主体的に働こうとするならば、どうしても「もうけ第一」主義でない持続可能なワーカーズコープでなければならないし、働いて造り出す製品も、人類や地球が少しでも持続できる

ことに寄与するものでなければならない。

しかし、それを持続させ実体化させるのになんという想像力が求められていることだろう。

エコテックの具体的活動を次回から紹介していきます。資料文献として次のものを合わせて読んでいただければ、より理解を深めるものになると思います。(エコテックでもこれらの本の取扱いを行っております)

- ①『日本との対話』—自主生産を通して人間が見える—ドナルド・ドーア対談 岩波書店
- ②「石けん運動の中からわたしたちの洗濯機ができた」 月刊『むすぶ』(1994.1)
- ③「協同組合の新しい出会い」藤岡一橋大教授対談 『生活ジャーナル』(1994.3)
- ④「環境家電の専門メーカーをつくった」『科学朝日』(1994.5) 朝日新聞社
- ⑤「廃食油から自然に優しい石けんをつくる」『トリガー』(1994.5) 日刊工業新聞社
- ⑥「家庭を大気汚染測定局に」朝日新聞(1994.2.23) 家庭欄
- ⑦「周りのNO₂濃度を測りませんか」東京新聞(1994.2.21) 特報
- ⑧『やっぱりドラム式洗濯機にきめた』小林勇著 合同出版
- ⑨『大気の汚れ』天谷和夫著 合同出版
- ⑩「エコテック式仕事おししが投げかけるもの」『仕事の発見』(1994.5) シーアンドシー
- ⑪「なにくそ! 人生もう一丁」『週刊現代』(1993.11.13・11.20)
- ⑫『生ゴミリサイクルのすすめ』有機農産物普及・堆肥化推進協会